



遊牧からのメッセージ

松原正毅

まつばらまさたけ:1942年生まれ。広島県出身、愛媛県松山市育ち。社会人類学者。国立民族学博物館名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授。元大阪外国語大学理事。専門は遊牧社会学。現在「坂の上の雲ミュージアム」(2007年4月開館)館長を務める。

歴史のなかの遊牧

遊牧は、ひとつの文明である。遊牧には、個別の文化をこえて参加が可能な装置と体系がそなわっている。この文明の装置と体系をうけいれさえすれば、遊牧民としてのくらしが成立するのである。

文明としての遊牧の特徴は、簡素さである。この簡素さという要素の存在は、全生活体系を通じて確認できる。遊牧生活は簡素そのものだ。遊牧世界には、思想をふくめずすべてに透明性がある。歴史のなかにも、みずからすすんで痕跡をのこそうとはしない。風がふきぬけてゆくなかで、かすかな草のそよぎや小枝のたわみに、遊牧の存在がうかがいがつてくるからいだ。

遊牧の基底にあるのは、移動性である。この移動性は、起源的には家畜化の対象となった群居性の有蹄類にそなわっていた習性に出目する。人間は、群居性の有蹄類の移動のあとを追っていったわけである。移動性を基底においた生活では、累積的な富の蓄積はおのずから制約される。このため、遊牧社会は極端な階層差のない平等な社会構造をもつ。農耕社会のような富の偏在が生起しないのである。

遊牧のもっともおおきな特徴は、自然に対して人工的な加工をくわえない点である。農耕が本来的に自然への人工的な加工を出発点としているのと、対照的といえる。遊牧においては、家畜群を媒介とすることによって、所与の生態系をそのままのかたちで利用しながら生活サイクルをたもちつづけてきた。遊牧が主要な舞台としていたのは、もともと農耕に利用されることのすくない草原や山岳地帯をふくむ乾燥地帯であった。歴史の展開につれて、遊牧の空間は農耕に蚕食されてゆく。

遊牧の起源は、農耕よりもふるい可能性がたつ。乳製品の製法が確立した段階では、畜産物を主体に生活を維持することはじゅうぶん可能であった。遊牧の生活に穀類はいはいるのは、のちに農耕との接触がはじまってからである。それに対応して農耕のなかに家畜がはいり、多様な畜産物の形態が出現する。紀元前8000年前後のアジアの初期農耕遺跡から発見されるヒツジやヤギの骨は、遊牧からの畜産への変化の状況を反映する遺物とかがえられる。

遊牧が、ユーラシアにおいてはたまたた歴史の役割はおおきい。その主要な役割は、歴史変動の内燃機関の機能といえる。歴史変動の節目に、遊牧の力がはたらいているのは確実である。ユーラシア中央部における城壁都市の形成にあたって、遊牧の攻撃性が契機としてはたらいた可能性がたつ。都市をかこむ城壁は、外部からの攻撃に対する防御施設として出現したのである。

東アジアでいえば、殷周文明の形成にあたって遊牧との接触が重要な核となっている。とくに殷周文明のなかの儀礼体系に使用された大量の犠牲獣の存在は、遊牧との接触を如実にしめすものといえる。200年以上にわたってつづく五胡十六国の乱は、遊牧のエネルギーと在来のエネルギーが衝突と融合をくりかえす歴史変動であった。このながい相互作用のなかから隋唐帝国が成立し、中国帝国のかたちが完成する。遊牧の衝撃力がもつとよく発揮されたのは、13世紀のモンゴルを中心とした世界帝国の形成においてであった。さまざまな局面で、遊牧は歴史変動の内燃機関の機能をはたしてきたのである。

遊牧の現在

遊牧は、過去の遺物ととらえられることがおおい。すでに、終焉の段階にあるともいわれる。事実、旧ソ連邦中央アジアにおいては、徹底的な遊牧の絶滅政策が実施された。1930年代には、集団化政策の強行に

ともなつて数百万人にのぼる遊牧民の死者を出した。これによって、伝統的な遊牧の息の根はほぼ完全にとめられたといえる。この地域の遊牧は、強圧的な力によって過去形の状態におくりにこまれたのである。旧ソ連邦における遊牧の絶滅政策は、遊牧がおくれた生産形態であるという根拠のうえにみとられた。

近代国家の成立にともなつて、ほとんどの地域で遊牧への大弾圧がおこなわれる。近代国家の要件となる徴税・義務教育・徴兵制のいづれにも、遊牧はおおきいおわいところがあったためである。遊牧民は、「まつろわぬ民」として国家権力による武力弾圧の対象となる。トルコにおいては、1930年代から1950年代にかけて、遊牧民の定住化政策が強力に推進される。厳罰をともなう法令の施行や軍隊による武力弾圧の手段もとられた。

ユーラシアの諸地域で進行した絶滅政策や強制的定住化政策は、確実に遊牧の終焉をもたらす効果を発揮した。遊牧の空間は、国境をふくむ境界線によって寸断され、移動性を制約するさまざまな条件が課せられる。さらに、遊牧の領域そのものが、耕地化された。大型農業機械の導入によって、耕地化の速度は加速する。遊牧を維持する場が、急速にせぼめられていった。遊牧の衰退は、急激にすすんだのである。

遊牧が目の敵のように絶滅の対象にされた起点には、農耕との異質性があつたことにはたしかであろう。中国の古代の歴史書『漢書』のなかでは、遊牧民は「人間の顔をしてはいるが、禽獣の心をもつて存在」と表現されている。

その背景には、遊牧への根強い偏見がある。歴史的には、異質性にくわえて遊牧民側からの攻撃や略奪が、偏見を生みだす原動力となつてきた。遊牧の側から見れば、略奪は生業の一部であった。古来から、遊牧民のリーダーの条件として、武勇の資質とさばきの公正さのほかに略奪品の配分における公平さがあげられている。

現代文明の系譜は、あきらかに農耕から発している。この系譜のなかでは、生産力至上主義という要素が重要視されている。遊牧は、現代文明の系譜とずいぶんずれたところに位置していることはたしかである。遊牧の存在価値は、ずれたところに位置していることにある。今後、現代文明のむかう方向を熟考するうえで、遊牧の位置からみえる風景が重要な価値をもちはじめたであろう。

遊牧の未来

遊牧は、これからどこへおかうのだろうか。最近、ユーラシアの一部の地域で、絶滅に瀕していた遊牧が再活性化化する現象がみられるようになった。その地域は、新疆北部とモンゴルである。新疆北部のアルタイ山脈や天山山脈においては、社会主義化の影響を強くうけながらも、カザフのひとを中心として遊牧は持続した。社会主義化時代を通じて、父系血縁集団を基底にした社会組織は、徹底的な弾圧をうけて解体する。遊牧集団の力を無力化するための措置であった。1980年代後半にはいつ、集団化政策の緊縛がゆるむとともに、遊牧は活性化化する。しかし、現在のところ、父系血縁集団に基底をおく社会組織の復活にはまはっていない。

モンゴルにおいては、社会主義体制の崩壊以後、かなりひろい範囲におたつて再遊牧化が進行している。社会主義時代に物資の配分センターの機能をになつてきた地方の役所群が、民主化の波のひろがりとともに存立の基底をうしなつて内部崩壊してゆく。配分すべき物資の供給が完全に途絶したためである。この配分機構の構成員のおおきくが、再遊牧化の道を選択した。モンゴル西部では、廃墟となつた役所などの施設

を数おおくみかける。モンゴルでは、再遊牧化とともに世帯単位にもつた社会組織の復活化の現象がみられる。社会主義化以前にはひろくみられたホト・アイルヤサーハルト・アイルなど世帯単位の協力関係をもつ社会組織が再興してきたのである。しかし、新疆北部と同様、まだ父系血縁集団に基底をおいた伝統的な社会組織の全面的な復活にはいたっていない。モンゴル西部のオプス県などでは、行政組織自体も遊牧民と移動をともにするようになってきた。これも、社会主義化以前にはひろくみられた行政形態である。

現在、モンゴルでは、村(ソム)境や県(アイマク)境をこえた移動が自由におこなわれてきている。もっともおおきな問題は、ひとつの遊牧地に複数の移動集団が集中したとき、調整機能をはたす社会組織がまだできあがっていない点である。地方行政の責任者は、この調整機能をほとんどもっていない。モンゴルの再遊牧化において、調整機能をそなえた社会組織づくりが緊急の課題といえる。

新疆北部やモンゴルは、生態系として遊牧の最適地のひとつといつてよい。それだからこそ、歴史を通じて遊牧集団の活発な活動がこの地域を中心におこなわれたのである。遊牧で生きるのがもっともふさわしい地域といえる。新疆北部における再遊牧化現象を目のあたりすると、遊牧の未来についてかんがえる必要性がでてくる。すくなくとも、遊牧の持続性を視野にいれながら、人類の未来をかんがえなければならぬ。

現在、遊牧の再評価をすべき時期なのである。歴史の再評価を通じて、遊牧のはたすべき役割がうかがいがつてくるであろう。遊牧が人類の未来に対して発しているメッセージには、つぎの三点がある。それは、土地所有のありかた、移動性、簡素さの三点である。

遊牧においては、基本的に土地所有の観念は発生しなかった。本来、土地は天に属するものである。近代的合理主義は、すべて私有権の肥大化のうえに構築されてきた。土地は私有権として細分され、所有権の至上主義が強調される。国民国家の理論は、ここに基底をおいている。土地所有の観念の不在は、近代的合理主義の恰好の餌食であった。植民地主義の理論は、この土地所有の観念の不在につけて切りとり自由という正当性を主張したのである。

地球の土地は、本来的に宇宙の生成からできた賜物である。地球そのものは、数十億年におたる生命体の共有の場ともいえる。それに対して人類という種の一部だけが私権をふりまわし、強引な所有権を主張しているのだ。人類は、たまさかの時間のあいだ、地球の土地を借用しているにすぎない。地球史のスパンのなかで、遊牧における土地所有の観念の不在を根源的な意味において再考しなければならぬのではない。

移動性と簡素さは、将来の時代においてもっとも重要な要素となりうる。情報化時代は、さまざまなレベルでの人びとの移動を加速する。簡素さは、いま世界規模で展開している生産性至上主義や経済至上主義の思想的ゆがみを映す鏡の役割をはたすであろう。

遊牧からのメッセージに耳をかたむける必要がある。このメッセージの解説を通じて、未来の文明のバランスをたもつ道をさぐりあてることができるとはならないだろう。遊牧自身は、みずからの基底をしっかりと保持しながら、情報化社会の利便性をとりこむ努力をすべきであろう。その方向性をうしなわなければ、遊牧の未来はあかるといえる。

小長谷有紀・楊海英編著『草原の遊牧文明 大モンゴル展』によつて(1998)より

松原先生のこの文章を初めて読んだのは「大モンゴル展」(1998年、国立民族学博物館)の実行委員として働いていた時だったと思います。翌1999年には、モンゴルのマイノリティを構成するバーリンヤハラチンなど内モンゴル東部への調査に同行させてもらい、いろいろな刺激を受けることができました。残念ながら、遊牧について先生が直接お話を聞く機会はありませんでしたが、この文章で先生が主張されている遊牧の特徴、そして人類の未来に発しているメッセージについてはずっと気にとどめてきたつもりです。

ロシアや中国の領土に取り残されたモンゴル人たちは大国の圧力で定住せざるを得ませんでした。ところが、独立国で民主化を果たしたモンゴル国においてさえ遊牧を自由に語り、再評価することは難しいのでしょうか。その意味では旧ソ連の強い影響下にあった時代と変わりがないようです。バーリン・モンゴルのある友人は「モンゴル人が近代化から取り残されたのは全て遊牧という生業が起因している」「これを捨て去る以外にモンゴル人に未来はないのだ」「『遊牧は素晴らしい』などというのは、定住して物質文明を謳歌する先進国に暮らす人間のエゴだ」と一刀両断です。それでは、遊牧を捨てて定住した(定住させられた)内モンゴルのモンゴル人は近代化を達成し得たのでしょうか。遊牧を捨ててさえすれば、現代モンゴル人が抱えるあらゆる問題が解決できるのでしょうか。

10年ほど前、アルハンガイ県イェタミル部の遊牧世帯でお世話になり、2か月余り遊牧民の暮らしを見聞することができました。千頭以上の家畜を有する遊牧民が「(できるなら便利な)定住生活をしたい」と言うのを聞いて「遊牧民にとっても引越は大変なのだ」と認識を改めました。定住して物欲を満たしたい、定住地で子供を条件の良い学校へやりたいなどの理由もあるでしょう。物質文明どぶりの「先進国」で自分たちは伝統をどうの昔に捨て去って、「地球環境を守るため伝統的遊牧を続けなさい」などとは言いつつもはあきらめません。そんなことを言う権利は私たちにないでしょう。

この10年間で遊牧をとりまく環境は劇的に変化しました。地球変動によって草原や沙漠の気候・河川・牧草が大きく変化しました。その上、鉱山開発による人為的な環境破壊も深刻です。優秀な千頭遊牧民でさえ「遊牧業だけで生計を立てていくのは難しい」そうです。モノがあふれる私たちの定住生活は良く見えるのだと思います。ただ、本当に遊牧を捨ててしまふことしかモンゴルが発展する道はないのか、もう一度しっかり検証してみたいのです。

世界史を創つた遊牧文明を残し(モンゴルがやめれば、遊牧は地球上からなくなりす)、モンゴルの自然環境を守っていく。移動を基底とした発展のあり方、遊牧民が培ってきた価値観などを通じて、未来の文明の新しいあり方、人類が生きて残るための新しい道、モンゴルから世界に向けて発信することではできないのでしょうか。このさきやかな願いが「先進国」のたわごとでないことを祈るばかりです。

(内田敦之)